

赤崎敏男 1979 「初期横穴墓の展開」『竹並遺跡 横穴墓』

橋口達也 1993 「横穴発生過程についての覚書」『古文化談叢』第30集（中）

2 西日本の横穴墓と墳丘

はじめに

横穴墓に墳丘を伴うことは1970年代前半以前には想定されていなかった。しかし、'74年から'76年に実施された福岡県竹並遺跡の調査で、丘陵頂部に主体部のない墳丘が確認され、墳丘と一部重複するように丘陵斜面に横穴墓の存在することが知られた。これによって横穴墓と墳丘が一体のものであることが想定された。別途、福岡県久戸横穴墓群と、山口県朝田墳墓群の横穴墓で、同様の事例が確認され、竹並遺跡での発見を追認することになった。

同じ頃、熊本大学の発掘チームも熊本県下で同様の横穴墓を見いだしていたが、これを積極的に評価するには至らなかった。'82年に刊行された報告書の序文は出版費の関係から「先駆的な所見例」に加われなかったことを残念がった。池内横穴墓群の調査は'68年であるから、横穴墓と墳丘に関する視点など毛頭なかった。むしろ、前庭に多数の土器が散乱する事実を認め、前庭の発掘に意を注いだ。それゆえ、横穴墓の位置する丘陵頂部は藪のままであり、踏査することもなかった。

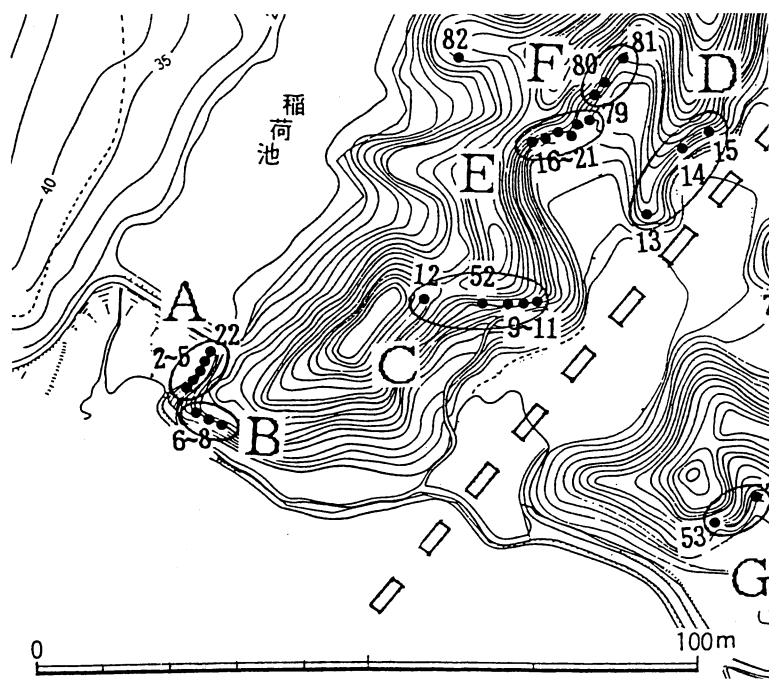
'81年から行われた大分県上ノ原横穴墓群の調査では、当初から墳丘と横穴墓の関係を追跡することを1つの課題とし、あらたに「テラス状遺構」を見だし、これが墳丘築造の下準備であったらしいことを明らかにしている。置田は'94年に横穴墓の基礎研究の一環として、宮崎市を訪問し、蓮ヶ池横穴墓に前方後円形の地形があり、横穴墓と一体であるらしいことを教えられ、ついで、池内横穴墓群のうち保存されていたA地区の踏査で、丘陵頂部の地形が前方後円形をなすことを知った。同じ年に発掘中の島根県島田池遺跡を見学し、ここでは前方後円形の地形が数基の横穴墓と一体をなすことを教えられた。池内横穴墓群A地区でも斜面に4基の横穴墓が穿たれているから、残された地形の実測図を作成する必要性を痛感した。さいわい、翌年には池内横穴墓群調査整理委員会の事業の一環として、高野を現場長として、地形測量が実施された。その結果は本報告に収録したとおりである。

墳丘のある横穴墓の事例

今後の研究の基礎資料として、以下に墳丘と横穴墓が一体とされる例を遺跡ごとに概説しておく。

宮崎市大字芳士字岩永迫 蓮ヶ池横穴墓群

3つの支群の西の南西にのびる丘陵地形が、南西向きの前方後円形をしていると指摘されている。これが盛り土による地形なのか、自然地形かは発掘調査が行われていないので不明である。この丘陵の南西裾に9基の、東側中腹に4基の横穴墓が築かれているが、12号横穴墓と呼ばれるものが、他の横穴墓より離れて、丘陵中腹より上位の、後円丘に相当する斜面に築かれている。こうした点で、前方後円形の地形と12号横穴墓が相関関係にあると見なされる。地形の細部の実測図はないが、前方後円形の全長は約14m強になろう。12号横穴墓は玄室が奥室と



挿図80 蓮ヶ池12号横穴墓と前方後円形の地形

熊本県阿蘇郡阿蘇町大字宮原字前田 御塚横穴群A穴

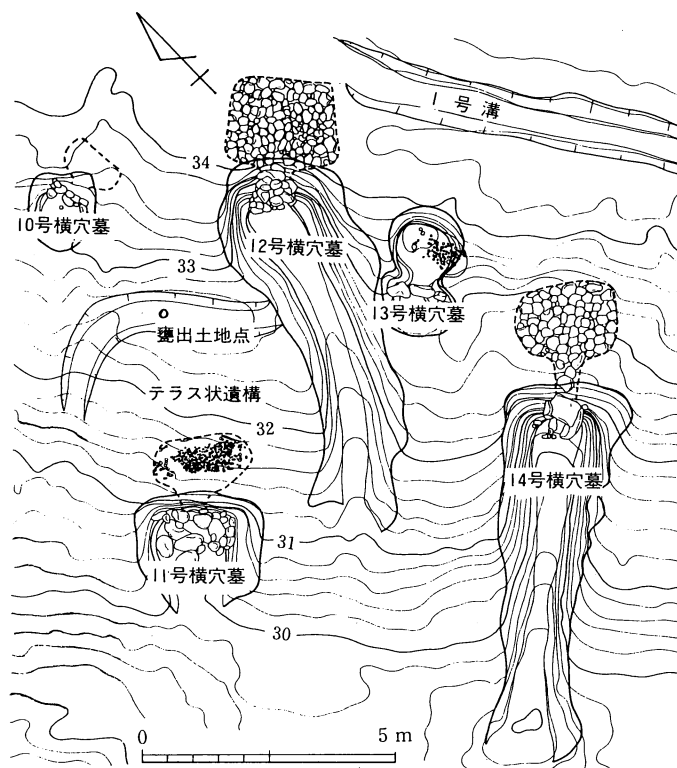
'75年に熊本大学考古学研究室によって、発掘された。この横穴墓は南斜面に築かれたもので、報告書は横穴墓掘削当時の地形かどうか不明であるとしながらも、「A穴の上は丸く盛り上がり、あたかも小円墳の観を呈する」としている。墳丘の大きさなどは不明である。玄室は平面1.8~2.1mの大きさで、長さ0.8mの羨道を板石で閉塞する。玄室から鉄刀子・ガラス玉が出土した。この横穴墓からは土器が出土せず、年代の決め手を欠く。隣接するB横穴墓

からは5世紀末の須恵器甕が出土するから、5世紀末から6世紀代の築造であろう。

平野芳英ほか「阿蘇町御塚横穴群A・B穴群」(熊本大学文学部考古学研究室『研究室活動報告』13) 1982年 4-18頁。

大分県下毛郡三光村 上ノ原横穴墓群

81基の横穴墓が'81~'85年にかけて、発掘調査された。この結果、12基の横穴墓では玄室上部の斜面に「テラス状遺構」が認められた。その多くは地山を階段状に削り出したもので、確実な墳丘が認められなかったが、いくつかは墳丘裾の溝と判



挿図81 上ノ原11号横穴墓と「テラス状遺構」

断される遺構が見いだされている。例えば、11号横穴墓では斜面に沿って地山を整形し、厚さ0.4mの盛り土が認められた。また、25号横穴墓は地山を4×6m削り、ここに0.7mの盛り土が認められた。12・25号横穴墓はともに墳丘は一辺が4m前後の方形と復元されていて、いずれも墳丘裾に当たる場所から供献土器が出土している。

「テラス状遺構」とされたものは墳丘の基盤と考えられるものである。これらの年代は5世紀後半から6世紀全般におよぶ。

村上久和ほか『上ノ原横穴墓群』I・II 1992年 414・540頁。

福岡県行橋市 竹並遺跡

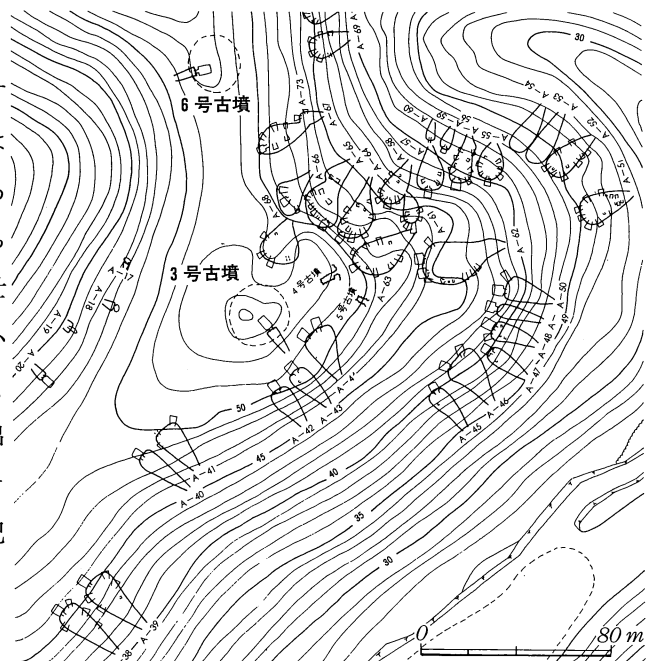
’74年から’76年に発掘調査が行われた福岡県行橋市竹並遺跡では948基の横穴墓が確認されている。このうち14基に墳丘が確認されたという。墳丘と横穴墓が一体をなす主な例は次の通りである。

番 号	墳丘の径	墳丘高さ	盛り土の高さ	横穴墓の全長	中心的な玄室の構造
A 3号墳	9.2×9.8	1.5	1.3	11.65	平面長方形・天井家形・妻入り
A 6号墳	11.0×12.6	1.5	0.9	8.8	平面長方形・天井家形・妻入り
A11号墳	6.0	1.5	不明	未調査	不明
A13号墳	6×9	0.6	不明	未調査	不明
G 2号墳	8.7×9.0	1.2	盛り土なし	5.78	平面楕円形・天井ドーム形
F 1号墳	58.5	1.5	1.5	3.43	墓道を同じくする横穴が3基 平面台形・天井ドーム形
F 6号墳	7.7	1.4	1.4	3.30	墓道を同じくする横穴が3基 平面方形・天井ドーム形
F10号墳	8.2×8.9	1.35	0.65	未調査	不明

(注) その他の横穴墓に伴う墳丘の大きさは不明。報告書記載と異なる点は図面から解釈した。

すなわち、墳丘の裾には溝をめぐるものがあり、盛り土するもの、あるいは地山の削り出しにより墳丘を作る例のことが明らかにされた。これらのうちF地区出土の土器が6世紀後半から7世紀初頭の特徴を示し、いずれも規模の小さい横穴墓を主体部とする。これに対し、A地区の横穴墓からはほとんど土器が出土しないが、玄室が大きく、F地区のそれより構造的に古いと想定され、6世紀中頃の年代が与えられる。

赤崎敏男ほか「墳丘を有する横穴墓」『竹並遺跡 横穴墓』1979年 328—351頁。



挿図82 竹並遺跡A 3号横穴墓と円墳

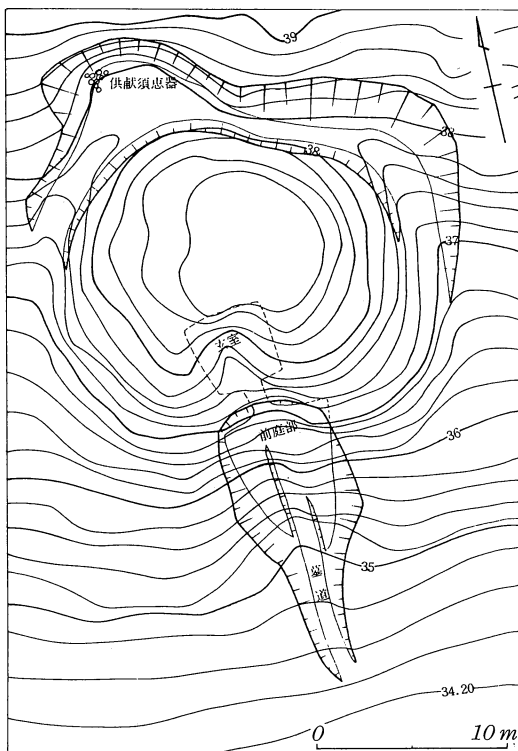
福岡県宗像郡大字福崎 久戸横穴墓群

このあたりは横穴墓の数少ない地域であるが、墳丘をもつ横穴墓が3基確認されたという。
酒井仁夫『久戸横穴群』（『宗像町文化財調査報告書』第2集）1979年（未見）。

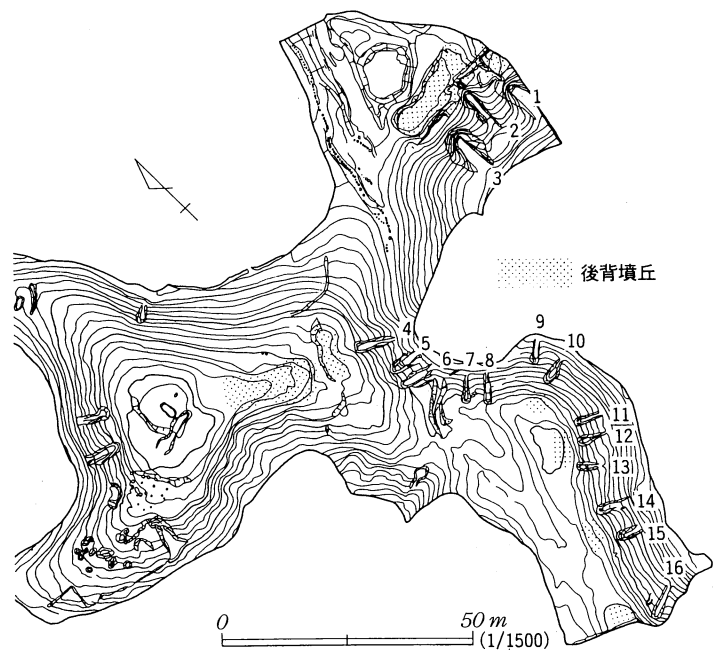
山口市朝田 朝田墳墓群第1地区 第1号「横穴古墳」

丘陵の先端斜面に築かれた、円墳と横穴墓が一体のものであることが75年の発掘調査で明らかにされた。丘陵の高い側に鍵形の溝がめぐって、これが墳丘裾に対応することが明らかになった。盛り土をして、径10～11m、高さ2.2mの墳丘を作る。溝の肩には須恵器杯蓋・杯が計6個据え置かれていた。盛り土をした墳丘には主体部がなく、墳頂から約5m下に地山を削り抜いた横穴墓が認められ、これが主体部と判定された。玄室は2m強の平面方形で、床に扁平な石を敷き、羨道の長さは0.65mあって、羨門を扁平な石で閉塞する。前庭は地山をオープン・カットして作る。玄室からは鉄斧・鉄鏃・鉄刀子・毛抜きが認められた。前庭・墓道からは土師器杯、須恵器杯が出土した。玄室と羨道は墳丘の下にあるが、墳丘中心から外れている。すなわち、墳丘外に前庭が位置する。須恵器はMT15の特徴を示し、5世紀後半の年代が与えられる。

柿本春次ほか『朝田墳墓群』1（『山口県埋蔵文化財調査報告』第32集）1976年 122～136頁。



挿図83 朝田墳墓群1号横穴墓と円墳



挿図84 島田池遺跡横穴墓と「後背墳丘」

島根県八束郡東出雲町出雲郷 島田池遺跡

'94年に19基の横穴墓を調査し、後背墳丘と推定される盛り土遺構が8箇所確認された。この遺跡での墳丘の特徴として、盛り土であること、その立地が尾根頂部寄りの横穴墓のある斜面に片寄っていること、多量の須恵器甕の破片が溝および墳丘裾から出土することである。また、前方後円(方)形になる可能性のものがあ、大きいものは全長20m前後になるものがある。

横穴墓の築造時期は6世紀後葉から7世紀前半までの期間で、追葬は7世紀後半におよぶ。

原田敏照「島根県島田池遺跡」『考古学研究』第42巻第1号 1995年 109-110頁。

まとめにかえて

以上は、管見にふれたものだけで、まだほかにも同様の例が見いだされているかも知れないし、墳丘と横穴墓の視点で報告書を検討すれば、類例が増加するであろう。しかし、上記の例だけを見ても墳丘をもつ横穴墓は5世紀末には出現し、6世紀末まで継続することが知られる。また、前方後方墳地帯の出雲で前方後方形の墳丘と横穴墓が一体をなし、前方後円墳地帯の日向に前方後円形の地形と横穴墓が一体をなすことを確認できたのは興味深い。

墳丘をもつ横穴墓の出自は、横穴式石室墳との関係で検討する必要があるし、墳丘をもたない横穴墓との関係が階層に基づくものかどうかなど検討すべき課題が多い。また、墳丘をもたないとされていた地下式横穴墓が、墳丘を伴っていた例が増加しつつあるから、それらとの関係なども今後検討しなければならない。こうした課題を検討するには、さらに墳丘のある横穴墓の類例の増加を待たねばならない。現状では類例が少なく、地域的な隔りがあるのは、単に偶然の発見によるもののようと思われる。

今後の研究のために、墳丘をもつ横穴墓に関する用語をまとめておく。

多少の意味合いの違いもあるが、墳丘をもった横穴墓を朝田墳墓群の報告書は「横穴古墳」、上ノ原遺跡では墳丘築造前の丘陵斜面の造作から、これを「テラス状遺構」と呼んでいる。また、島田池遺跡では「後背墳丘」という言葉を作り出した。「横穴古墳」は横穴式石室墳と紛らわしいし、「テラス状遺構」の意味するところが抽象的である。こうした点で、「後背墳丘」の発音は「光背」とおなじで、意味を間違えられるおそれがあるが、横穴墓を中心に据え、その背後の墳丘という点で適切な用語と思われる。つまり、主体部は従来通り、「横穴墓」と呼び、墳丘を含めた呼称は「後背墳丘のある横穴墓」とするのが適切だろう。